

アモス書第8章4－7節

テモテへの手紙一第2章1－8節

ルカによる福音書第16章1－13節

本日の聖書日課は、信仰と社会との関わりが主題といえます。三つの聖書箇所、それぞれ時代も内容も異なりますが、社会において何を信じて歩むべきかについて教えているのです。

旧約のアモス書は、信仰と経済的・政治的体制に関する事柄との関わりについて語っています。預言者アモスは、紀元前8世紀ごろ、主に北イスラエル王国において活躍しました。主なる神様を恐れず貧しい人びとを苦しめる支配者層に対して、厳しい神の言を語る、社会正義の預言者と言われます。ただし、そのような支配者層が、主なる神様を全く無視していたのかということそうではありません。不正を働く人々の発言に、「**新月祭はいつ終わるのか。穀物売りたいたいものだ。安息日はいつ終わるのか。麦を売りに出したいものだ。エファ升を小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかし、弱い者を金で、貧しい者を履物一足分の値で買い取ろう。また、屑麦を売ろう**」（アモス 8:5-6）とある通り、主なる神様が定めた律法が規定する、働いてはならない新月祭、安息日を守っているのです。しかし、他方で律法が許していない、数値をごまかす不正と、同胞を奴隷とすることを考えているのです。預言者アモスの批判は、全く信仰を持たない人に対するものではなく、外見上信仰を守っているが、実際には不信仰である人に対する批判にほかなりません。法律は守っているが、実は悪を行っている、そのような事例は、法律が整った現代でもあると思います。そのような行為を、いったい誰が裁いてくれるのか、その問いに対して、預言者アモスは、「**ヤコブの誇りにかけて誓われた。『私は、彼らが行ったすべてのことを、いつまでも忘れない。』**」（アモス 8:7）と、紀元前8世紀の時代において、主なる神様は、そのような不正を見過ごさないと語るのです。

さて、不正という事柄に関していえば、本日の福音書がその事柄に深く関わっています。小見出しにも「『不正な管理人』のたとえ」とあります。ただし、このイエス様のたとえ話は、素直に読みますと、どう解釈したらよいか難しい箇所がいくつもあります。あるいは、前後で矛盾するような文言もあります。しかし、この譬えの結論は明確です。最後にある「**あなたがたは、神と富とに仕えることはできない**」（ルカ 16:13）です。その結論からすべてを見直すとき、この譬えの意味が分かります。

「仕える」という言葉は、僕として主人などに仕えることを意味します。ルカ福音書では直前の放蕩息子の譬えで「**しかし、兄は父親に言った。『このとおり、私は何年もお父さんに仕えています』**」（ルカ 15:29）という箇所で用いられています。神に対しても富に対しても象徴的な意味で用いられているのですが、この「仕える」という行為を理解するためには、もう一つの「忠実」という言葉が深く関わっています。「忠実」という言葉は「信仰」とも訳すことができる言葉だからです。

わたしたちは、「信仰」というと、「行動・行い」ではなく、「心のあり方」などと思ってしまいますが、『聖書』の「信仰」は、神を主人として仕え行動することです。心の方向と行動との一致が大切なのです。アモスが批判した人々は、心が表面的にしか主なる神様に仕えていない・忠実ではなかったのも、主なる神様の許さない行動を平然と生み出してしまっていたのです。

イエス様のたとえ話において、金持ちである主人がどのような人なのか解釈が難しいところですが、大前提としてあることは、そもそも律法を守っていたら、大金持ちにはなっていないということがあります。レビ記25章には有名な借金帳消しの「ヨベルの年」への言及があります。また、そもそも同胞から利子を取って貸すことは禁止されています（申命記23：20-21、外国人に対しては可）。主なる神様に対して忠実に歩んでいけば、大金持ちになることはないはずなのです。逆に、社会でどんなに失敗したとして、主なる神様を信じる同胞がいる社会で生きているならば、必ず救済措置があるはずなのです。もちろん、それらの律法に基づいた社会の仕組みは、アモスの時代もイエス様の時代もうまく機能していなかったのが実情です。しかし、イエス様は、たとえの中の話ですが、不正の管理人は、自己保全のためであるが、主人に借金のある人を助ける行動をとりました。表面的には不正な行動ですが、内容的には律法に則した行動をしたのです。それゆえに、この不正な管理人は、結果として富ではなく、神に仕えたことになった、イエス様はそのように結論付けたのです。それだけではなく、その管理人の姿を見た金持ちの主人は、自分が金持ちであることに疑問を持たなかったのですが、大切に事柄に気づき（多分）、管理人をほめたのでしょう。

このたとえ話は、いくつかのイエス様の言葉を組み合わせで作られたものかもしれません。少なくとも、実際の出来事をもとにしたものではないでしょう。また、なんとなく納得いかない部分も多々あります。アモスのように、不正を働く人を激しく批判し、豊かな人や不正な人が断罪される方がすっきりします。しかし、本日の使徒書、第二テモテが語るように、「願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人のために献げなさい。王たちやすべての位の高い人のためにも献げなさい。私たちが、常に敬虔と気品を保ち、穏やかで静かな生活を送るためです。これは、私たちの救い主である神の前に良いことであり、喜ばれることです。神は、すべての人が救われて、真理を認識するようになることを望んでおられます。」（2テモ2：1-4）とも『聖書』は語ります。大切なのは、今、不正を働いている支配層にいる人、豊かな生活にある人、それらの人々が滅ぶことを願うのではなく、それらの人々が、主なる神様に立ち返ることを願うことです。それは、不正を見逃すことでも、容認することでもありません。すべての人が、主なる神様に立ち返り歩み始めることを願うことです。イエス様は、革命を起こすために十字架にかかったのではなく、すべての人が主なる神様に立ち返るために十字架かかられたからです。

現代社会は、アモスの時代、イエス様の時代よりも複雑です。しかし、主なる神様に仕えるということは、変わりません。そして、そのような人々を、主なる神様が必ずもっともよい道へと導いてくださることも変わらないと思います。そのことを心に刻みながら歩み続けたいと思います。